

今年度の指導員訪問の総括と来年度へ向けての重要点

岡崎市立小豆坂小学校 杉浦 大作

1 指導員訪問を振り返って

「個別最適な学び」「主体的・対話的で深い学び」の実現を踏まえた多くの授業実践が行われた。どの実践も、教材選びや教師の出を工夫していることがうかがえた。「準備運動と補助運動」「発問」「支援」をキーワードにして、訪問を振り返る。

(1) 導入段階における効果的な準備運動と補助運動

準備運動は、体を温めることや急な運動によって体に負担をかけないようにするために行う。さらに、心のほぐし、主運動につながる心構えと運動に向かう気持ちを高めるなどの目的がある。そして、本時の学習において、「できる」につながる基礎感覚づくりとなる補助運動を行うとよい。

A中学校のB教諭は、3年生の器械運動「マット運動」の実践を行った。準備運動では、仲間と関わり合いながら、背倒立から膝を曲げて起き上がる補助運動を行った。背倒立から立ち上がることができなかった子供は、仲間の補助を得ることで成功体験と起き上がる感覚を味わうことができ、ともに喜び合う姿が見られた。これにより、マット運動に苦手意識をもつ子供は、運動に向かおうとする意欲を高めることができた。また、どの子供も、前転などの技の終末姿勢を丁寧に練習する姿が見られ、技の組み合わせにつながる基礎感覚づくりを主体的に行うことができた。

(2) 主体的な学びにつなげる発問

C小学校のD教諭は、5年生のボール運動「ゴール型（タグラグビー）」の実践を行った。導入で、前時の学習で明らかになった課題を出し合う場面を設け、「自分一人で解決できそうか」と問うことで、子供は課題を自分のこととして捉え、一人で解決できない学習課題に対してチームで協力して解決していこうという目指す姿を明確にもつことができた。これにより、子供はゲーム中に動きを確認したり指摘したりしながら、主体的に学びを進めることができた。

(3) 仲間とともに課題解決をし、喜びを味わう支援

課題や目指す姿に沿って、自己観察や相互観察する力を養うことは、子供が学びの成果を実感するために大切なことである。そして、「課題を見つける」「課題を共有する」ことが、仲間とともに課題解決を進め、深く学ぶきっかけとなる。

E小学校のF教諭は、6年生のボール運動「ゴール型（フットホッケー）」の実践を行った。学習課題を「シュートチャンスを作るために攻撃の作戦を工夫しよう」とし、各チームに、作戦が書かれたホワイトボードと動きを記入するゲーム記録用紙を準備した。ゲームでは、子供はホワイトボードを使って動きを確認し、作戦を試行錯誤した。また、ゲーム記録用紙を使って、作戦の工夫の視点となる「スペースやスピード、方向」に沿って、仲間の動きを観察したり記録したりした。チームの話合いでは、本時のゲーム記録を基に、ゲームを振り返り、次時の課題を見つけて共有することができた。

2 来年度に向けて

子供が主体的に学ぼうとする授業を繰り返し行うことは、学びの発展につながる。そして、仲間と

課題を発見して解決策を考える環境づくりをすることで、深い学びが実現されるだろう。訪問では、チーム学習に取り組む実践が多くあった。子供に活動を委ねつつ、誰一人取り残さないように、教師はファシリテートをしていく。そのポイントは、「みんなにとって分かりやすい学習課題」の設定であると考えている。体育が苦手な子供ががんばることができ、体育が得意な子供は教えたり追究したりするような課題と環境づくりをすることで、新しい視点に気づき、深い学びが実現される。

岡崎市立福岡中学校 大野 孝輔

1 指導員訪問を振り返って

保健体育科の目標は、子供の「生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する力」を育むことである。子供にとってその原動力となるのは、次の3点である。

- ①運動やスポーツを通して、その楽しさや喜びを実感する経験を繰り返すこと
- ②体力向上に果たす運動やスポーツの役割を認識すること
- ③多様な仲間と関わることで運動やスポーツに対する見方・考え方を広げること

指導員訪問では、これらの視点に着目して単元と授業を構想し、目指す子供の姿の実現に向け、多様な手だてを講じる実践が見られた。

(1) 種目の特性に気づき、本質に迫ることが、楽しさや喜びの実感につながる

A中学校のB教諭は、1年生の球技「ネット型(バレーボール)」において、連携プレーにつながる動きがよくできている子供を見つけ、繰り返し称賛の声をかけた。これにより子供は、ボールを操作する仲間に体を向ける動作や、次のプレーを予測した動き出しなど、オフザボールの動きに着目して自分のプレーを見直すことができた。その後、ゲームを繰り返すごとに戦術の練度が増し、ボールを落とさずにつなげられる子供や仲間と息を合わせてプレーできる子供が増えていった。

(2) 体力向上をねらい、単元構想や授業展開を工夫する

C中学校のD教諭は、3年生の体づくり運動「実生活に生かす運動の計画」の実践を行った。子供にとって身近な「体育大会で披露する演舞の動きにつながる準備運動づくり」を教材としたことで、子供は体力向上を自分事として捉え、追究意欲を高めた。また、教師は、3つのチーム形態を学習内容や進捗状況により使い分けた。チーム間等質のホームチーム、同じ課題をもつ子供が集まるジグソーチーム、互いに助言し合う兄弟チームである。子供は、仲間との比較や批評を通して自己の動きを見つめ、改善点に気づき、動きの質を高めることができた。

(3) 多様な仲間と関わり合うことで、より広く深い学びへたどり着く

E中学校のF教諭は、1年生の球技「ゴール型(サークルバスケット)」の実践を行った。男女共習授業である。ゴールを円の中心に設置し、どの角度からでもシュートできるようにした場の設定と少人数ゲームにした点が有効に働き、誰もが役割を果たそうと意欲的にゲームへ参加できた。これにより、試合間に行うチームでの意見交流も活発に行われ、多彩な戦術の構築につなげていくことができた。

2 来年度に向けて

○ 効率のよい「情報の共有」と効果的な「情報の活用」を

各種アプリを用いて収集した子供の意見や気づき、演技やゲームの映像等、保健体育科の授業でも情報があふれる時代になった。情報は学びの土台となる。その有益性を誰もが実感する今だからこそ、情報を効率よく共有し、効果的に活用する方法を考えたい。情報の取り扱いが、子供の運動時間を極端に妨げてはいないだろうか。また、情報の整理についても一考したい。情報が山積みになっていないだろうか。収集した情報を整理し、分類した上で提示する方法を模索していく必要がある。